（第3種郵便物認可）　2025年(令和7年)2月5日（水曜日）　読売新聞

解説

介護計画にAI 効率化期待

■「新たな気づき」にも

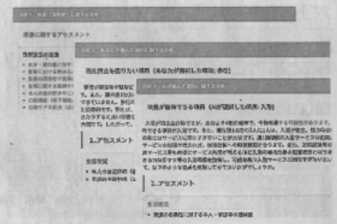
介護が必要な人のケアプラン（介護サービス計画書）の作成に、AI（人工知能）を使う動きが広がってきた。作成作業の負担の軽減や、より効果的な計画作りにつながると期待されるためだ。活用に際してのルール作りも必要になりそうだ。

編集委員
二階堂祥生

ケアプランは、ケアマネジャー（介護支援専門員）が高齢者の希望や心身の状態、家族の状況などを踏まえて作成する。1回作って終わりではなく、介護の必要性の変化を把握し、見直していく必要がある。ケアマネジャーはこのほか、高齢者の生活を支える様々な業務を担っているケースが多く、人手不足もあって一人一人にかかる負担が大きくなっている。

こうした中で進むのが、AIの活用だ。介護事業者などの出資により2017年に設立されたシーディーアイ（CDI）は、ケアマネジャーが高齢者の情報や要望を入力すると、その人に応じたケアプランがすぐに示されるAIを開発した。AIには介護サービスの利用に関する約47万件のデータを学習させており、これが判断のベースになる。AIは、プランを使うと体の状態が何%改善するのかといった予測値も示す。

また、情報漏えいを防ぐ仕組みを備えた生成AIが、ケアマネジャーの質問に回答する機能もある。



CDI社が開発したケアプラン作成AIの画面イメージ＝同社提供

期待されるのは、業務の効率化だけではない。介護事業大手「セントケア東京」の蛯谷典子・主任ケアマネジャーは、介護保険制度が始まった00年度から業務に携わるベテランだが、「AIが作ったケアプランから新たな気づきを得られる」と話す。

高齢者やその家族と介護方針について話し合う際、長年の経験に基づく自らの判断にAIのプランを合わせて示すことで、より納得感を持ってもらえるほか、若手ケアマネジャーの指導時に説明がしやすくなることもメリットという。

とはいえ、蛯谷さんは「AIにケアプラン作りを任せるわけではない」と強調する。高齢者のきめ細かいニーズを把握し、生活環境を踏まえて最終的にプランをまとめるのは人の役割だとの考えだ。

CDIの浜岡邦雅社長も「AIはあくまでサポート役。より良いケアプランになるよう、上手に使ってもらいたい」と話す。

CDIのAIを利用するケアマネジャーは3年前に5000人ほどだったが、現在は3万5000人ほどに増えた。同様のAIは、大手電機や新興企業も開発を進めている。

実際の活用にあたってはAIを使っていることや、ケアマネジャーの考え方を高齢者に丁寧に説明し、納得してもらうことなどが欠かせず、そのための仕組み作りが課題になる。

国際医療福祉大の石山麗子教授は、「高齢化が進むなか、ケアプラン作りにAIを取り入れる必要性は高まっているが、ケアマネジャーの専門的な知見が重要であることに変わりはない」と指摘。「AIの活用については現場任せにせず、国がガイドライン（指針）を示すべきだ」と話す。